

高井一の
中部に活!
インタビュー 高井 一(東海テレビアナウンサー)

国際連合地域開発センター 所長

高瀬 千賀子 氏



中部は持続可能な地域開発のお手本

月面着陸の同時通訳に感動

高井 小田原生まれ、東京育ちだと伺っていますが、国連機関の所長になられた方がどのような幼少期・少女時代を過ごされたのか、とても興味のあるところですね。まずはそのあたりから。

高瀬 「お受験」の走りを経験したことが、私の幼少期の出来事としては一番大きいでしょうね。

高井 中学校受験ですか。

高瀬 いえ小学校受験です。当時は本当に珍しかったですね。いくつか受けて国立の学校にも受かったのですが、「子供心」にお受験の大変さが身に

しみたのでしょうかね。この先受験がないところに進みたいと言い張り、大学まで一貫教育の私立学校に入りました。そこで、おおらかにのんびり過ごすことができました。

高井 どちらの学校ですか。

高瀬 学習院です。

高井 聞くところによると、学習院では「ごめんあそばせ」といった言葉遣いが通常だと伺ったことがあります、本当ですか。

高瀬 私たちの頃は、もう「ごめんあそばせ」とは言いませんでしたが、昔は言っていたようですね。挨拶は当時も「ごきげんよう」でしたが。

高井 「ごきげんよう」はいい響きですね。そういう環境の中で、今のご自身のありようにつながる経験を何かされたのでしょうか。

高瀬 みなさんご存知かと思いますが、学習院は華族のための学校としてつくられました。しかし、戦後は“新”学習院としてどなたでも入れる私立学校となり、私が入学したころは、自分の代から学習院という方もかなりいらっしゃいました。もちろん、私もその一人で、典型的な平民代表です。いろいろな方がおられる中で、自分のやりたいことをやりながら学生生活を送れて、人間形成のうえでいい経験を積ませてもらえたと思います。

また、私は小学4年生から英語を習っていましたが、1967年7月、アポロ11号の人類初の月面着陸を日本に伝えてくれた西山千さんの同時通訳に感動し、同時通訳者になりたいと思いました。「ひとりの人間にとっては小さな一歩だが、人類にとって大きな飛躍だ。」という名言は有名ですよ。中学校で水泳部に入り運動にもかなり励みましたが、それと並行して英語は本当に大好きで一所懸命にやりました。

シンガポールでの高校生活で芽生えた 途上国の経済発展に携わる夢

高井 同時通訳の夢が、その後「国連で地域開発に携わる」ことへと変わったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

高瀬 直接的なきっかけは、中学3年生の終わりに薬のアレルギー反応である薬疹になってしまったことです。かなりひどく、高熱が3日間続いて入院。これ以上高熱が続いたらあきらめてくださいと宣告されたほどの状態でした。何とか山場は脱し、1年ぐらい経つと少し元気になってきたので、高校2年生の時、前々から絶対に行きたいと考えていた「AFS」というホームステイシステムに申し込みました。しかし、体が完全に回復していないという理由で学校からの推薦が受けられませんでした。ちょうどそんな時、英語を学ぶ別の機会がたまたま訪れて、私はそれに飛

びついたのでした。

高井 たまたま訪れた機会とは何だったのでしょうか。

高瀬 父がシンガポールに転勤になったのです。私には4つ上の姉がいて、彼女はもう大学生だったので行かないという選択をしましたが、私は英語が学びたかったので「どうしても行く。」と言い張り、学習院を高校2年生で中退という形をとって、父について行きました。

高井 学習院を中退とは、よく決断されましたね。

高瀬 皆さんそう思いますよね。そのまま大学へも進めましたから。とにかく英語に触れる環境に身を置きたかったのですが、実はその後の大学のこともしっかり考えていました。シンガポールに行く前に帰国子女向けの9月入学制度のある国際基督大学を訪れて話を聞き、自分ではシンガポールで2年間の高校生活を終えたら入学するという道を決めていたのです。

高井 すごい行動力ですね。シンガポールに行かれたことが、結果的に国連で働きたいという思いを芽生えさせたのでしょうか。

高瀬 振り返るとそうだと思います。ひとつには、シンガポールで、父を通して日本の当時のビジネスマンの縮図を見ました。実際にビジネスの現場に行ったわけではありませんが、家族同伴で食事などをご一緒させていただく機会を何度か持つなかで、男性社会という現実を肌で感じたわけです。もうひとつは、経済を学び始めたことも要因となりましたね。私がシンガポールで通っていたのは「United World College of South East Asia (ユナイテッドワールドカレッジ・東南アジア校)」という、イギリスのウェールズに本拠を置くインターナショナルスクールでした。今は世界各地にあります。現在は、ウェールズ、カナダのヴィクトリアに続いて3校目としてシンガポールにできたばかりでした。英語のネイティブの人たちがいる環境の中で、私の英語ではとても太刀打ちできないことに気づき、同時通訳は無理だと思い知ったのです。同時に、人の言ったことを訳すという仕事よりも、英語を道具に自分の考えを伝えるこ

との方が面白いのではないかと思ひ始めたのです。しかも、イギリス流のプリユニバーシティのコースは、高校レベルの過程は終えたという前提で上級レベルのことを学ぶところ。3科目を自分で選択し、その3科目しか勉強しないのです。私は、前から興味があった地理と、あまり英語を使わなくていいということで数学、そして最後の一つは先生に勧められて経済を選択しました。

高井 あれだけ英語をやりたくてシンガポールへ行かれたのに、ある意味、「人生というのはこういうことがある。」という見本のような展開ですね。

高瀬 まさにそうですね。そうして始めてみると、経済がとて面白くなってしまっ。当時のシンガポールの状況とも呼応したところがあるかもしれません。私がいた1975年～77年のシンガポールは経済成長の離陸期の時代でしたが、周りと比較すれば少し良いというぐらいの段階でまだまだ途上国でした。周りのマレーシアやインドネシアも途上国。こういう人たちの経済発展に貢献できたらいいなということ、ぼんやりと思ひ始めたのです。

行動力で運の連鎖を起し 国連職員の道を開く

高井 その後、ご自身で決めておられた国際基督大学へ進まれ、さらにイギリスのサセックス大学の大学院で開発経済学を学ばれましたね。素人考えでは、非常に順調に国連への道を歩まれたように思うのですが、そもそも国連の職員になるには、どういう方法があるのか、一般にはほとんど知られていませんよね。

高瀬 その当時、私も全くわからなかったのです。ただ、国際基督大学から国連に入られる方は多くて、3年生になって大学院生との交流の中でいろいろと話を聞くうちに、経済を学ぶ女性である私の目には、「国連というのは、まだ雇用機会均等法のない日本で働くより魅力的な職場に違いない。」と強く映ったのです。そして、「国連に行くなら

大学院に行く必要がある。」というアドバイスを受けて、サセックス大学で開発経済学を学ぼうと決め、進学したわけです。

高井 ようやく具体的にになったわけですね。

高瀬 いえいえ、大学院での1年が終わる段階になってなお、具体的に国連職員になる方法がわかっていたわけではありませんでした。当時はインターネットなどなく、たやすく情報が入手できる時代ではありませんでしたから。思ひ付いたのが、どこの機関でも人事部というはあるに違いないということ。そこで、思ひ当たるいくつかの機関の人事部長宛に手紙を書いたのです。しかし、時代的にはバッドタイミング、経済危機の最中で、どこも新規採用はありません。しかも、私のように経験がない人は雇えないという返事。ただその中で、国際連合工業開発機関（UNIDO）の人事部にいらっしゃった日本人の方がお手紙をくださり、一つの方法として、政府がお金を出して国連機関で働かせる制度があることを教えていただきました。そして、これも偶然なのですが、サセックス大学の先輩の奥さま（同じくサセックス大学出身）がユネスコ（国際連合教育科学文化機関）で働いておられ、彼女のところに行きがてら、ユネスコの人事部の方に会っていただくことができました。やはり、一般の公募はないけれども、政府がバックアップしているものなら受けられるということで、そちらの面接を受けることができ、かなりの好感触であったので、良い返事を期待して喜んで帰ってきました。

高井 並はずれた行動力が運を呼び込んだという感じですね。

高瀬 確かに、動かなければ何も始まりませんから、そうかもしれませんね。ただ、ユネスコの人事担当者から「連絡する。」と言われたのですが、何も来ない。待ちきれずもう一度連絡してみたら、「日本政府が経費負担しなければいけないものなので日本政府に聞いてみたところ、そんな話は知らないと言われた。」と。それはそうですね、私自身は日本政府には何もアプローチしていませんから。



高井 日本政府が後押しする制度というのは、具体的にはどういうものだったのですか。

高瀬 「JPO派遣制度」というものです。これは自国の若手職員を国際機関に送り込むために多くの国が実施しているもので、日本では外務省が費用を負担しています。窓口は、外務省の「国際機関人事センター」というところです。ユネスコに問い合わせた後にその所長からお手紙をいただき、「ユネスコから問い合わせがあったが、日本の試験が必要です。JPO派遣制度の今年の試験は終わっており、一体どうなっているのですか。」という質問を逆にされたわけです。しかし、ありがたいことに手紙はそこで終わらず、「興味があるということはわかったので、なぜそういう仕事に就きたいかを書いて送ってください。」と付け加えられていました。

高井 それはすごい、お役所仕事とは思えないフレキシブルな対応ですね。

高瀬 ええ、当時、日本政府もできるだけ多くの人材を国際機関に出したいという思いが背景にあったと思いますが、作文を書いて送ったところ、本当にフレキシブルに対応して下さり、「わかりました。」という返事とともに、「せっかくヨーロッパにいるのだから、ユネスコだけでなく、ジュネーブやウィーンにもさまざまな国際機関があるので行ってみてください。そして、できたらユニセフ（国際連合児童基金）や国連開発計画（UNDP）のあるニューヨークにも回ってください。」と。自費を使ってそのアドバイス通りにし、ユニセフなどの面接を受けました。ユニセフの面接時の反

応がとても良く、ウガンダの話が出たので「私はウガンダに行くんだ。」と思いながら東京に帰ってきました。

高井 経歴を拝見すると、ユニセフの経験はないようですが。

高瀬 日本に帰り、先ほどの国際機関人事センターの担当者の方とお話ししたら、「高瀬さんは経済が専門だから、やはり国際連合工業開発機関にしてください。」と。それならどうしてニューヨークに行けと言ったんだろう？という思いもありつつ、結局、アソシエートエキスパート（※1）として国連の専門機関である国際連合工業開発機関のジャカルタ勤務となり、1年間勤務しました。

高井 今日、高瀬所長のこれまでの歩みをお聞きすることで、一般にはなかなか身近に感じられない国連について知る良い機会になると思いますので、もう少し続けてお尋ねさせてください。国際連合工業開発機関は1年のみの勤務で、1984年からはニューヨークの国連事務局での勤務となりましたね。

高瀬 アソシエートエキスパートやJPO派遣制度というのは、そのまま国際機関に残れるものではないのです。残るための努力をしてくださいという段階。国連に正規職員として勤務するには国際競争試験というものがあり、それに受かる必要があります。私の場合、ジャカルタの国際連合工業開発機関に行つてすぐにそのお知らせが来ました。国連というのは各国からの拠出金で賄われており、その金額は主に経済力に見合う合意された比率によって決まっています。国連としては、国ごとの拠出金の割合に応じて人材を入れたいのです。ですから、人材の比率がその割合に達していない国に対してこの試験を行います。日本は、拠出金ではかなり貢献していますから多くの方が活躍していないといけません。しかし、実際には国連職員に占める日本人の割合は低いので、この試

※1 JPOと同様だが、JPOが機関の現地事務所総務担当をすれば、アソシエートエキスパートは準専門家として、大概プロジェクトに就く。

験は日本人に対していつもオープンです。6月に赴任して、7月ごろに話があり、9月にはもう試験だというわけです。来たばかりでとんでもないと思いましたが、日本人で国連開発計画インドネシア事務所の副所長に相談したところ、そういう機会は是非使うべきだと言われ、また国際機関人事センターの方には試験があったら是非受けてくださいと言われていましたので、日本に帰って東京で試験を受けてみたところ、一次の筆記、二次の面接と受かり、結果、ニューヨークの国連事務局勤務となりました。

国連職員になるには、試験が一番の近道です。ただ、この試験はエントリーレベルの人のみなので、ある程度の何らかの経験を積んでいれば、一般公募に応募するなどまた違う入り方もあります。

「平和」を維持するために必要な「開発」の意図するところ

高井 では、その国連という組織ですが、第二次大戦後の世界の平和と安全を維持するための組織であると、われわれは社会科で習いました。よくニュースで耳にするのは、安保理、PKO、ユニセフといった言葉ですが、国連というのはどういう組織ですか。

高瀬 安保理とは安全保障理事会を略したのですが、この言葉をよく耳にされるのは日本政府が安保理に入ることを大きな目標にしているからでしょう。国連の目的は国連憲章1条に示されており、「国際平和・安全の維持」、「諸国間の友好関係の発展」、「経済的・社会的・文化的・人道的な国際問題の解決のため、および人権・基本的自由の助長のための国際協力」の3つです。これらの目的を達成するため、総会、安全保障理事会、経済社会理事会、信託統治理事会、国際司法裁判所、事務局という6つの主要機関と多くの付属機関・補助機関が置かれています。

もう少し分かり易く、あえておおまかに言うと、「平和」と「発展」という両輪が根底にあります。政治的な筋を整えながら人権を確保して世界を平

和にする、そのためには経済社会発展が必要だという考えです。主に「安全保障理事会」が平和を、「経済社会理事会」が発展を担います。「経済社会理事会」は、経済・社会・文化・教育・保健の分野で、ユニセフなどの専門機関などを含む国連ファミリーの活動を調整するために設置された機関です。私どもの「国際連合地域開発センター（UNCRD）」は、国連事務局にある経済社会局の中の特別機関です。

高井 さて、国連のさまざまな機関の本拠地は、主にニューヨークやジュネーブ、ウィーンなどにありますが、唯一名古屋にあるのが、今お名前が挙がった、高瀬所長をトップとする「国際連合地域開発センター」（以下、国連地域開発センター）ですね。



国連経済社会局勤務時代の高瀬氏（写真中央）

高瀬 そうです。1971年に、国連と日本政府との協定により名古屋市に設立されました。唯一ということで言うと、国連諸機関の中で地域開発の支援を目的とする唯一の組織でもあります。

高井 国連地域開発センターがいうところの「地域開発」とは、どのようなものなのでしょう。

高瀬 われわれがいう「地域」とは、国の中の地域を指します。国レベルの主導のものではなく、もう少し住民に近いレベルで開発をしようということ。国のレベルだけで計画をつくっていると、地域に密接した細かな開発ができない。首都中心になってしまったり、格差が広がったりというようなことになってしまいます。

また、このセンターの設立が議論され始めた1960年代から環境にも目を向けていて、地域開発のテーマの中に最初から「環境」が入っています。

そうした背景のもと、国より小さい「地域」（県や市町村）を対象として、その地域の実情やそこに住んでいる人々が何を望んでいるかを十分に理解して、それらに見合うさまざまな事業を進めることで地域の生活水準を向上させ、ひいてはその国全体、世界全体の発展につなげようという考えを推進するために、当センターが設立されました。

世界の地域が参考にできる 実に多くの好例がある中部

高井 その本拠地として、どうして名古屋が選ばれたのでしょうか。

高瀬 国連でその議論がされている頃、すでに名古屋では、モデルケースとして好例だと考えられる取り組みがスタートしていたからです。戦後、人口が地方から名古屋にかなり流れ込み、この地域も、ご他聞にもれず住宅問題なり交通問題なりが起っており、それらを解決する整備が進められていました。それは、途上国にとってはまさにモデルケースであり、研修の場としてふさわしい。さらに、名古屋を中心とする中部は、工業も進んでいるが農業や林業においてもさまざまな実例がある。それらが高く評価されたと聞いています。

高井 今のお話を伺って、実際にこの地域に住んでいると身近すぎて忘れがちですが、自然環境としては、海もあり山岳、森林、平野もある。産業的にも農業、林業、工業、さらに最先端工業もある。中部というのはそういうところだったんですね。改めて見直しました。

高瀬 しかもこの地域は、いまだに好例を出し続けていると思います。地域によって「開発とは何か。」ということは違ってきます。また、発展途上国においても、都市計画もかなり重要になってきています。地域という範囲が柔軟になってきているなか、例えば都市という概念も、都市地域と

して扱います。都市の計画、交通をどうするか、都市と地方との関係をどうするか、そういうことも非常に大きな課題になってきています。中部は、そういった課題に対応できるさまざまな顔を持っていて、名古屋に国連地域開発センターがある意義は今でも大きいのです。

東日本被災地への調査チーム派遣で 見えた地域を「コーディネート」する重要性

高井 国連地域開発センターでは、大きな柱として防災にも取り組んでおられ、今年の2月には東日本大震災の被災地に調査チームを派遣されましたね。

高瀬 実は、東日本への調査チームの派遣は、防災というより復興がテーマです。われわれが開発の最大のテーマとしている「持続可能な開発」という視点で、どのように復興に取り組むべきなのかという意見交換をすることが目的でした。環境や地場産業の国内の専門家だけでなく、海外の専門家も含むチームを編成して、3県にまたがる6自治体に行きました。海外からは、リサイクルやごみ処理、グリーン経済、また、三陸海岸ということで生物多様性の専門家で、インド洋の津波の後のエコシステム再生に関わる仕事に実際に従事した人などが参加しました。自治体によってそれぞれトピックが違ふと考え、できる限りどんなことにも対応できるように、多岐にわたる専門家を連れていきました。



仮設店舗にて営業を再開した飲食店街を視察する調査チーム（金石市）

高井 そのなかで、どのような成果がありましたか。

高瀬 まず、あの時点で地元の方々と膝を突き合わせて話ができたとことが大きかったと思います。皆さん本当に一所懸命にやっておられるのですが、地域だけではできないこともたくさんあります。特にそのなかで、われわれに課せられた課題でもあると強く感じたのは、ある専門家の方が言われたことです。どうしても仮設住宅などの「とりあえず」のことに焦点が行きがちだが、それに加えて今後の経済手段の確保にもできるだけ早く取り組み、どんなに難しくても二本立てでやっていく必要がある。ここに知恵を絞らないといけない。まさに、それこそが大切だと感じました。

それと、アメリカの災害対策専門家がどこの自治体でも強調していたのが、商工会議所や青年会などが、グループごとにそれぞれいいことをやっているが、何より大事なことは、皆さんが一緒になって「一つの声」として政府なり県なりに交渉することだと。そのアドバイスに対して、現場のみなさんが「えっ？」という顔をなさっていたのが印象的でした。それぞれのグループでまとまることに精一杯で、なかなか連携するところまでいっていないということでしょう。「コーディネート」というのが一つ大きなポイントかもしれません。

持続可能な開発を進める鍵は “実例を示し” 訴え続けていくこと

高井 最近、国連地域開発センターでは、国内、特に中部への情報発信に力を入れておられるようですが、どのような活動をされているのでしょうか。

高瀬 われわれの実際の仕事の対象は開発途上国です。この地域に拠点を置き、しかもその経験を使わさせていただいているのに、残念ながらこの地域の方々に近い存在になっていないという現実があります。先ほどもお話ししましたが、このセンターが名古屋にあるという存在意義は非常に大きく、それをわかっていただくことが、われわれ

の活動にとってもこの地域の可能性という点においても、非常に大きなポイントだと思います。

高井 中部という地域は広報下手だと言われますが、この地にあるからでしょうか、国連地域開発センターさんも広報下手の面があるようですね。

高瀬 今まではそうだったように思います。それで、去年は名古屋での大きな国際イベントに参加し、北野大先生やSKE48のメンバーの協力を得て授業形態による「3R（※2）って何？」というイベントを開催しました。一般の方のイメージでは、国連地域開発センターと「3R」がストレートに結びつかないと思いますが、実は、そこにこそわれわれが目指す「開発」の姿があります。設立当初から「環境」を大きなテーマにしてきたとお話ししましたが、今、それを象徴する言葉として「持続可能な開発（環境保全を考慮した節度ある開発）」ということを掲げています。しかし、「持続可能な」という形容詞がついたことで、開発途上国には開発しづらくなったという印象を与えているところがあります。開発途上国から見ると、自分たちが欲しいのは開発であってコストも時間もかかる「持続可能な」はいらないと。

高井 それを払拭するには、どうしたらいいのでしょうか。

高瀬 持続可能でない開発というのは、公害や一極集中を生み出す構図をつくり、結局、環境的にも経済的にも社会的にも損をすることになります。特に、長い目で見た時のコストが少ないことが強調できれば、受け入れてもらいやすいのではないかと思います。そのために大切なことは、実例を示しながら訴え続けていくことです。この中部には、公害に苦しみ、そして克服した四日市があります。最初からそうならないように開発する手段を教え、実際に現場を見ることで、より現実的に伝えられる。さらに、ハイブリッドシティ、ソーラーの試みなど先進的な取り組み現場に連れて行

※2 リデュース（Reduceゴミそのものを減らす）・リユース（Reuse繰り返し使う）・リサイクル（Recycle再び資源として利用する）

けば、将来このように計画していけばいいのではないかと具体的にイメージできる。こうした実例を示しながら「持続可能」を訴える取り組みを続けることで、「開発」と言った時には、それがすでに持続可能であるという状況にしていくことが、われわれの最大の使命だと思っています。

国際研修卒業生たちが期待する 国連地域開発センターと中部の今

高井 先ほどは、中部という地域についてある意味お褒めの言葉をいただきましたが、国連地域開発センターとこの中部がともにより良い未来に向けて歩いていくうえで注文もあるかと思うのですが、何かありますか。

高瀬 われわれがこの中部地域を使わせてもらっているのと同じように、地域でわれわれをもっと使っていただきたいですね。敷居は全然高くありませんから。例えば、「国連のことを教えて欲しい」と言っただけであれば、講師を派遣して説明します。それは、学校でも企業でもどなたでも結構です。われわれを活用することで、広がったり繋がったりする未来があると思います。また、この地で行っている国際研修プログラムは、開発途上国の行政官を招へいして、地域づくりなどに必要な能力を習得する研修ですが、設立以来ずっと続けてきております。そのプログラムは、講義だけでなく実際に現場に行き、自分の目で学びます。初期にこのプログラムを受けた方々は、それぞれの国でかなりの地位についておられる方



国際研修プログラムの様子

が多く、最近では「センターは今どうなっている？うちのグループを連れて行きたいのだが。」という連絡をよくいただきます。彼らの中部地域への期待は、今すごく高まっていると感じています。

高井 そういうことに貢献する中で、ビジネスチャンスも広げていくということですね。

国際社会で求められる 「日本人」の特性

高瀬 ええ。それと、中部にというより日本全体に対して、いつも私をもったいないと思っているのは、日本には本当にすごい技術があり、もちろん海外にも発信しているのですが、もっともっと他に発信すべきものがあるのではないかということです。例えば、携帯電話ですが、日本の中だけで発展してしまって、とても優れているものなのに、なぜか日本以外で使われていない。そういうものが、実は意外に多い気がします。技術だけでなく人材も同じです。例えば、さきほどお話ししました国連の試験もそうです。一次の時点では、受験した人の番号だけが表示されるのでどこの国の方かわかりませんが、私が試験官として採点をする時に、答案内容の書き方で東洋人かなと思うことがあります。そういう時、つい日本人だといいなと思います。一次試験後に国籍が出てくると、日本人はほとんどおらず中国人が非常に多いのです。

高井 今のご指摘は、非常に大きな課題ですね。日本人の場合、どうしても言葉の壁があって海外へ出て行きにくいということもあるようですが、国際舞台で実際に活躍しておられる立場から、何か思っておられることなどありますか。

高瀬 実は私は、どこにいても日本人でいたい、日本人であり続けたいと思っています。気の使い方だとか和を強調するやり方、これはインドネシアなど他の国にもあって日本人特有とは言えないとは思いますが、少なくとも日本人の特性であることは間違いありません。喧嘩を売ることはほとんどしない。どちらかというと一歩引いてまとめ

ていく。これは、ややもすれば自己主張ばかりが飛び交う国際的な場において、とても必要な人材としての要素だと思います。シンガポールでの学生時代に、イギリス人の先生が言われた、「文化の違いを本当に理解しようとするのは無理かもしれないが、受け入れることは可能だ。」という言葉が今も心に残っています。例えば小さな例ですが、ヨーロッパの人は日本人がお辞儀をすることは理解できないが、それを習慣だと考えて受け入れることはできるということです。それを聞いてから、私はとても気が楽になりました。そういうことでいいんだと。

高井 「違いがある中で共存していく」というのは、そういうことなのでしょうね。日本人はそれを受け入れやすい国民ですから、「受け入れる」ということの美德というか意義を世界に発信していくことも、実は日本人の世界貢献なのかもしれませんね。

高瀬 ええ、そう思います。それとともに、実はもう一つ、海外に持ち出すと大いに貢献できるのではないかと思うことがあるのです。

高井 それはなんでしょう。

高瀬 個人的に、幕末の志士や、明治維新の頃の歴史が好きですが、今、あの当時の「日本を開発し先進国にしたい」というエネルギーを開発途上国に持ち込めれば、かなりいい起爆剤になるのではないかと思います。

高井 確かに、輝かしい日本の未来を目指して、地方から湧き出したエネルギーでしたね。

高瀬 ええ。地域開発の現場にいと、地域にああいうカリスマ的な人がいれば、その地域は目覚ましく発展するのではないかとよく思います。

高井 ぜひ、国連地域開発センターさんで、それぞれの地域で志士を育てるプロジェクトを実現していただきたいですね。

世界各地で住むという夢

高井 最後に、ご自身の夢をお聞かせください。

高瀬 一つは仕事とも関連しますが、世界から紛

争がなくなることですね。そのために、仕事を通して先ほどお話しした「お互いを分かり合うスタイル」を広めていけたらと思います。

私的なことでは、住んでみたいところがいくつかあって、それを叶えられたらいいなと思います。日本では京都。ヨーロッパでは、仕事をしながらパリなどのフランス語圏やイギリスのロンドンに住んでみたいですね。大学院生時代にイギリスのブライトンに住んでいましたが、施設も古く勉強がたいへんだったという記憶しかなくて、設備の整った家で快適なロンドンライフを楽しみたいです。あとは、基本的にあたたかいところが向いているので、エネルギーにあふれているバンコクあたりもいいですね。

高井 実際に暮らすというのは、旅で行くのとは全く違うのでしょうか。本日は、ありがとうございました。



Profile

高瀬 千賀子 (たかせ ちかこ)

国際連合地域開発センター(UNCRD)所長
 国連工業開発機関(在ジャカルタ)においてアソシエイトエキスパートとして勤務後、1984年10月より国連事務局、国際経済社会局開発研究・政策分析部勤務。その後、政策調整・持続可能な開発局持続可能な開発部に移り、生物多様性条約事務局にも約3年間勤務。国連経済社会局経済社会理事會支援・調整部(政策調整課副課長)を経て2011年3月より所長代行、2012年2月より現職。

●ひと口メモ

地域開発は途上国だけの課題ではなく、現今の日本でも重要なテーマです。「バスに乗り遅れるな」的な発想ではなく、地域の特性を生かしたものでなくてはなりません。

それぞれの歴史や風土に根差すのですから、千篇一律というわけにはいきません。ましてや「持続可能」という地球規模の責任も伴うようになりました。

こうなると、個々のケースの成否を握るのは、地域に住む人の「開発」についてのフィロソフィーということになります。

所長は「志士」と表現されました。「開発」を主導する人の思いや熱意が重要だということです。センターが設立当初から国際研修を続けているのも、人材を育てることが「地域開発」の根幹となるからでしょう。

幕末の志士は、変革という時代の要請に突き動かされました。同じように、名古屋(中部)にあ

るモデルケースが、海外からの研修生に強い動機づけをしているのなら、それは嬉しいことです。ならば我々も中部地域が、何を持っているのか、どう活かせばよいのかに目を向け、どんな時代になっても常に新しいモデルを地域の内から発信していけるよう、知恵を絞り続けたいものです。

「地域開発」は技術やノウハウの指導もさることながら、地域の人が自発的に行動する環境整備こそが重要なのだと考えました。

.....
高井 一 (たかい はじめ)

東海テレビアナウンサー。1953年、京都府生まれ。同志社大学文学部新聞学科卒。1976年、東海テレビに入社。1997年、名古屋大学大学院多元数理科学研究科修了。現在、編成局アナウンサー専門局長。

